

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間： 2007 年度 ～2009 年度

課題番号：19520423

研究課題名 (和文) 付帯状況の意味論：主体性との関わりから見た認知的構文研究

研究課題名 (英文) Semantics of Attendant Circumstance: A Cognitive Study on Circumstantial Constructions and its relation to Subjectivity

研究代表者 早瀬 尚子 (HAYASE NAOKO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：00263179

研究成果の概要 (和文)：

英語の分詞構文は、通常分詞句の主語が主節の主語と一致するべきとされる。不一致のものは「懸垂分詞」と呼ばれ、分詞構文の中でも破格と文法書に記載されてきたが、一方で慣用的な分詞構文には主語が不一致のものが多々見られる。

本研究ではこの懸垂分詞の実態をコーパス収集例に基づいて調査し、主節・分詞句それぞれが表す事態を分類し、そのタイプ頻度とトークン頻度等の観点から検討した。その結果、懸垂分詞表現は、発話者の観点から主体的に事態を発見する「発見のシナリオ」とも言うべき構文の意味を一貫して表すことがわかった。

研究成果の概要 (英文)：

Dangling participles are considered incorrect usage in written Standard English. Nonetheless, dangling participles enjoy widespread usage, particularly in spoken English. This study argues that the use of dangling participles is semantically and cognitively motivated. In adopting a usage-based view and analyzing attested data from the British National Corpus, this study shows that constructions with a dangling participle describe a coherent “cognizance scenario” as their constructional meaning. The dangling participial construction evokes a conceptualizer who conceives the situation described in the main clause. Thanks to its constructional semantics, the dangling participle is especially common in text genres which focus on the interaction with the hearer.

The dangling participial construction is closely related to the Ground, i.e. to the speaker and the hearer and the time of speech. Its constructional meaning is therefore highly subjective or, in including the hearer, intersubjective. In spite of the notorious “inconsistency of the controller subject”, the construction as a whole is fully motivated as an instance of subjective construal.

Another theoretical implication of the present study is the importance of a subjective construal at speech time. The dangling participial construction is ideally suited to express the speaker’s subjective view of a state of affairs in an ongoing discourse. We do not seem to talk much about events or actions objectively, but rather about “how things are from our perspective.” This communicative factor has motivated the “notorious” dangling participles and their entrenched use in conversation in spite of efforts of generations of prescriptive grammarians and teacher to dispel its use.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：懸垂分詞 主体化 分詞構文 コーパス Usage-Based

1. 研究開始当初の背景

認知言語学では言語化の対象となる客体的な状況を主として考察の対象としており、主体化・主観化という、発話者を取り込んだ構文的意味の研究については後発であった。発話者がどの観点から事態を捉えてどのような見え方を言語化するのか、を要素として考え合わせれば、構文研究を従来よりも包括的に行えるのではないかと考えた。

研究代表者は過去に付帯状況を表す表現として分詞構文の調査を行った（早瀬 1993, 1997, 2002）。時間的な関係を表す分詞構文に関してはアスペクトに注目して2つの事態を比較し、主節に Figure と目される事態が配置される原則があること、また概念的な上下関係や因果関係を表す分詞構文については原因となるものを基本的に Ground として分詞で表すのが無標形式であることを確認している。

しかしこれまでの研究では、話者が客観的な観察者として機能するケースに検討対象を限っており、発話者の役割を積極的にとりこむ「主体性」という視点に欠けていた。これ以降、話者がどこにいてどういう視点で場面を捉えているのかという要素を考慮に入れば、従来よりも広い範囲の分詞構文を統一的に考察・検討できるという見通しを持つに至った。

特に、ナラティブの側面から考えると、語り手というメタ的な存在も言語表現の意味を考慮する上での重要な一因となるため、広く視点論という観点からも付帯状況表現に現れる特徴が明らかになり、構文研究と視点論との融合も可能であることが期待された。

2. 研究の目的

このような着想のもと、構文の意味と主体性というテーマで亜種とされていた懸垂分詞構文の研究を行い、懸垂分詞節と主節にそれぞれ表される2つの事態状況を、主体がどう捉えてどう表現しているか、またその際に表現しやすい事態の傾向はないか、を探ることを目的とした。

本研究の特色・独創的な点および目標として次の3点を掲げた。

- (1) 主体性・主観性と構文との関わりの解明
Langacker (1991) で個別の構文との関わりが、また Traugott (1995, 1996, 2003 など) の一連の研究では in fact, actually, since などの接続詞、談話標識に関する研究が積み重ねられているが、付帯状況にまつわる構文一般についてこのような主体性・主観性との関連を追究する研究はまだ例を見ない。その点でも（認知）言語学の分野に着実に貢献できると考える。
- (2) 多言語比較、類型論的視点
日英語比較を出発としてその他の言語にも分析の目を向けることで、自然言語における付帯状況表現のパターンの可能性を示すことが可能である。
- (3) 用法基盤的 (Usage-Based) な枠組みへのサポート
コーパスデータを検討対象とすることで、母語話者の言語直観のみに依存することなく、付帯状況表現の現状をあるが

まに提示できる。これにより、母語話者の言語直観だけでは得られなかった言語傾向を明らかにでき、かつ、言語変化の動機づけを生起頻度等の心理的実在性のある概念で確認することができる。また認知言語学の基本的主張を更に裏付ける研究となる。

3. 研究の方法

British National Corpus を用いて、文頭に生じる分詞形を 100 選定して検索し、その後、意味上の主語が一致していない懸垂分詞用法と見なされるものを手作業で仕分けてデータを作成した。このデータを元に、1) 懸垂分詞節で主として用いられやすい事態、2) 主節で主として用いられやすい事態、をそれぞれ事態解釈のレベルで分類し、それぞれのトークン頻度とタイプ頻度を調査した。

近年の認知言語学における用法基盤モデルでは、実際に言語がどう用いられているかのあり方が言語の変化や特徴付けを説明すると考えている。特にトークン頻度とタイプ頻度は、構文カテゴリーの構造を明らかにする重要な手がかりを提供するものと考えられており、この手順に従って懸垂分詞構文のカテゴリー構造を明らかにすることを試みた。具体的には、トークン頻度が高い事態解釈分類グループはこの構文のプロトタイプを成すものであると認定される。またタイプ頻度の高い事態解釈分類グループは、その構文表現の生産性の高さに関係する。この関わりから、どのような事態を表すものが懸垂分詞構文で用いられやすいのかの傾向を明らかにすることを目標とした。

更に、懸垂分詞節で表されやすい事態と、主節で表されやすい事態との組み合わせを考察し、懸垂分詞構文全体の「構文的意味」を抽出した。「構文文法」では、部分の総和以上のものが全体から得られる場合、それは構文が与える意味であると考えている。この考え方に照らして、主節および懸垂分詞節それぞれが表している文字通りの意味とを構成的に足し合わせたものと、懸垂分詞構文全体から得られる意味のパターンとを比較検討し、ほぼすべてのデータに共通して抽出できる、言語化されていないテキスト的な意味を構文の意味として抽出した。

4. 研究成果

以上の研究手法を用いた結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 「観察者・発話者 (= 分詞句の主語) の移動の結果、主節の事態が知覚・観察される」という、非明示ではあるが構文が与えているシナリオ的意味 (= 「発見のシナリオ」) が、構文全体の表す意味として抽出された。

このシナリオ的な意味は懸垂分詞構文全体に共通して見いだされるものである。懸垂分詞節と主節それぞれの事態の組み合わせをしても、これに合致するシナリオを作成できない場合 (たとえば常識的に不可能な組み合わせであったり、生理的・物理的にその解釈が無理な事態の組み合わせであったり) すると、懸垂分詞構文は不適格になることが明らかになった。

- (2) 主節は観察者・発話者の知覚内容と解釈される必要がある。

主節はその 9 割近くが状態事態を表していた。状態事態は分詞節の事態とは無関係に成立する事態なので、そのままでは分詞節—主節の事態連鎖を首尾一貫したものとして解釈することが難しい。一方で主節内容を観察者・発話者の知覚内容であると解釈すれば、(1)との絡みで分詞節—主節の意味的なギャップを自然なシナリオでつなぐことが可能となる。

- (3) 懸垂分詞構文は、主節が現在時制であったり分詞句表現が仮想移動であったり等の特徴から、バーチャルで概念的な事態把握を表すための構文である。

このことは、懸垂分詞構文の主體的・主観的な性質を表している。また同時に、この構文が用いられやすい場面が限られていることを意味している。

- (4) 懸垂分詞・主節の 2 つの事態は、字義通りには互いに因果関係のない独立した存在だが、メタ的な観察者・発話者の存在およびその知覚行為を補うことで、初めて知覚の原則でもある Figure-Ground の原則に合致することができ、これによって動機づけら

れ関連づけられる。

懸垂分詞構文だけではなく、分詞構文一般が、アスペクト的観点から見て Figure-Ground の原則に合致していることを、過去の研究で見えてきたが、それとつながる特徴を持っていることが明らかになった。

- (5) この懸垂分詞構文の表している事態把握は、2つの事態連鎖を客観的第三者的視点から表すことを好む英語があまり好まないタイプの事態把握であった（むしろこれは日本語が好むタイプの事態把握である）。

懸垂分詞は、英語という言語がデフォルトとする事態把握にはなじまないが故に、破格として忌み嫌われてきたが、しかし認知的な事態把握としては、日本語等に見られるように自然であるため、そのような事態把握が自然であるような会話や論述文では慣用表現として生き残っていると考えられる。

「発見のシナリオ」で2つの事態を結ぶ際、談話認知レベルでは自然であっても、文レベルに適用できるかは言語によって異なる。本研究はこのような類型論的研究の中にも位置づけられるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 早瀬尚子 (2009) 「形容詞か副詞か? 副詞としての形容詞形とその叙述性」『認知言語学論考』8, 125-155. (査読無)

[学会発表] (計2件)

- ① 早瀬尚子 (2009) 「懸垂分詞構文における「内」の視点」筑波大学文芸学部 言語学講演会 (2009. 9. 6)
- ② Hayase, Naoko (2007) Cognitive Motivation for Dangling Participles in English, 10th. International Cognitive Linguistics Conference, Krakow, Poland. (2007. 7. 20)

[図書] (計1件)

- ① 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』開拓社出版 (「英語懸垂分詞と「内」の視点」55-97.)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早瀬 尚子 (HAYASE NAOKO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：00263179

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：